

電子複写不可

神風特別攻撃隊

5
東京
14



沖縄に対する第二次世界大戦の戦いは、戦術部隊の編制のなれどである。と申しますのは、此処こそ1945年の春、民族が特攻々態と自ら独特の方法により敵国海空軍兵力を全滅すべく企てたところである。82日の間戦斗は苛烈を極めた。82日の間、日本のすばらしい若人達は沖縄周辺の海空に死を決して飛上つたのである。そして、82日間の間米海軍の将兵は彼等の攻撃を回避するため必死にかつ、見事に戦つたのである。神風はその美名を残したが生存した艦隊を撃退し得なかつたことも事實である。

沖縄は西南諸島(琉球)の中最も大きく人口も又最も多い島である。工場地九州からわずか350マイル、東京から845マイルであり、又サイパンにある我々のB-29基地より1210マイルの処にあつて数多くの飛行場用地を提供し、この地よりほとんどあらゆる型の飛行場が作戦を遂行することができた。沖縄は又、数個所の見事に艦船停泊地があり、かつ、連合軍による沖縄占有は、日本の台湾、朝鮮及び中国本土との連絡を切断するに至らしめた。しかしながら沖縄は、日本人により充分に理解させられたことであるが、日本の計画された侵略によつて不可欠な足場となつていた。

我々の沖縄襲撃は成功ではあつたが、日本人を驚愕させた。この絶対絶命の情勢は、彼等を多大にして最も狂信的な努力へとあほり立てたのであつた。120,000名の者は、全可動飛行機と残存帝国艦隊をもつて防戦に立上つた。米海軍大将レイモンド A. スプルーアンズ指揮下の連合軍は陸、海軍及び海兵隊548,000名、戦闘艦艇37(英国太平洋艦隊所属21艦隊を含む)さらに1,139の補助艇より編成されていた。

日本人は特攻攻撃こそ我々に効果的反撃を加へるため取り得る唯一の

手段であると疑信させられていた。しかしこの信の背後にある理由を我々に納得させるため6ヶ月前の1944年11月レイテ島の戦いにもどらなければならぬ。

その当時日本に対する勝算は圧倒的であつた。制海権による日本の初期の主動権は、ずつと以前に喪失してしまつていた。

1944年6月比島沖海戦において日本艦隊は圧倒的大打撃を受けた。日本の攻撃の手段としては、基地航空隊群、そのとう乗員は哀れな程未経験者であり、そして、海上艦艇の戦闘力だけで艦載機の支援を欠いていた。この残された手段は、帝国を危機存亡から救うために一つの奇蹟を起すであろうとすべての者は考へていた。海上、母艦、爆撃及び潜水艦兵力をも何ら奇蹟を遂行し得ないと言ふことが次々に明らかとなつて来た。

当時のオノ海軍航空隊群司令テヲオカ・ケンペイ提督は昭和19年10月18日以下のように日本人の感想を集めて居る。

吾々は、その對点を暴露する代り、もはや戦の常道をもつて抗戦することはできない。もしも戦闘機乗りが犠牲を志願する前例を立てるならば他の者達もこれに続くであろう。これ年の前例は、陸軍(地上戦闘部隊)を鼓舞するであらう。吾々はたゞ敵の船団に仕当り攻撃することによつてのみ敵は停滞し、祖国は救われると思つたのである。10月25日に、日本国民は常道攻撃と特攻攻撃の必戦効果を検討することができたのである。

その日の3機の戦闘機と57機の爆撃機は損害を与えることが出来なかつたのに対して一方6機の神風機は3隻の護衛空母を撃沈した。その作戦の最初の3ヶ月間に神風機は撃沈121、大破53を記録した。特攻の卓越性は明白であつた。そして日本人の信念が直実であるこ

とが証明された。これ等神風機隊の初期の成功はより進部指揮官と民衆の狂熱に頼られ、そして結果首途したのである。

奇蹟の裏面はその日記に暗示しているように、特攻作戦に全力を挙げる。その理由は2つに分けられる。すなわち一つは心理的であり、他の一つは軍事的なものである。「Kamikaze」を言葉通り直訳すれば「神様の風」の謂である。あるいは日本人がそれを説明する言葉にしたがえば曰く神風の名称は往時蒙古の役とうの時、蒙古の大軍をその一撃で海底に沈め、もつて日本国を困難から救つた「神の吹かせ給うた台風」----神風が、日本の若い飛行士達の愛国心に裏打ちされて、人間の弾丸という形で、今回再び吹いて呉れるようにと熱烈な祈りから生れて来るのである。」と。(註文の中略の語は事と異なり、その日記に書いてある通りである)

しかし、神風機の攻撃は、天来のインスピレーション以上のものを日本国民にもたらした。戦時中の日本陸軍の空軍總司令部總指揮官、河辺中將は、戦後語つていわく「我々はいかなる科学上の優勢にも優るとも劣らないという精神的な確信を堅持し、かつ、戦いをやめるを人て考えは夢にも思わなかつたのだ」。

次の事も又注意すべき事項である。日本人は神風攻撃を「自殺行為」とは見なさなかつた。帝国海軍猪口力平大佐が説明して言うように「我々日本人は、生命を天皇と國家とに捧げている。又我々は「武士道」にしたがつて最良の死所を尋ねることをこゝろ希う。神風精神はこうした感情の裏を突いているのだ。神風作戦の背後にある軍事的な理由も又明白であつた。本質的にはこれ等のものは比島沖海戦における初期の特攻攻撃の背後にある理由と一致していた。しかし1945年4月日本人自身が見出した戦局は6ヶ月前のそれよりも一層悪かつた。

レイテ湾、それに続く諸海戦及び我が(アメリカの)潜水艦による日本の補給線に対する封鎖作戦によつて蒙つた甚大な損害のため、日本航空機訓練を積んだパイロット、飛行機製造原材料^{燃料}における不足はそれこそひどいものであつた。

日本帝国海軍は超弩級艦大和、巡洋艦「やなぎ」及び九隻の駆逐艦から成る一つに編成された戦闘艦隊にその力が滅つていた。しかし、此の勢力は、才58機動部隊の航空母が、日本海から出撃して来る同日本艦隊を捕足した4月7日、3隻の駆逐艦を除いてことごとく海底のもくづと消え失せた。日本側が、我々との会戦を望めなくなつた以上、残された道はたゞ一つしか無くなつた。

訓練日数少く、経験の少ない(飛行時間わずか100時間)パイロットは、特攻攻撃に用いられるより外に道は無かつた。又神風天鼠のため、祭だんの生にえとして生命を捨てようとしている人間的資材は不足していなかつた。日本空軍は、事实上武士道の旋回しかがつて神風戦術を取らざるを得なかつた。こうして戦局の段階は定まつた。日本の大本営は、全軍が特攻攻撃の手段に訴ふるべきであると嘗て未曾有の命令を発した事を確認した。そしてその特別攻撃は事实上、我がアメリカの目覚ましい陸、海、空共同作戦に抗する彼ら唯一の方法となつたのである。沖運戦の最初の主要作戦は82隻の艦艇から成る才58機動部隊が、九州の飛行場及び呉や神戸の艦隊基地に空襲を加えた。1945年3月18日から21日の間に起つた。アメリカ軍の飛行機計116機の犠牲を払つて528機の敵機を撃墜し、地上にあつた16機を撃破し、多数の格納庫、工場、倉庫を破壊もしくはこれに損害を与えた。此の攻撃の結果、日本軍は初期の沖縄上陸作戦にほとんど一週間の間、我が方に強力な空襲を全く加えることができた。

あつた。

4月1日、攻撃隊はハグシ海岸に上陸し、さらに茶谷、カテナ飛行場へ入陸した。4月4日と7日、危機に瀕した帝国の怒りをこめて、神風が吹きまくつた。此の最初の9回にわたる神風特攻隊において、ほとんど同数の普通の戦闘機や偵察機にもなわれた355機の特別攻撃隊が沖縄を急襲した。2日間にわたる邪悪な戦闘において22神風機が米艦船への衝突(体当たり)に成功した。日本側の損害合計は未知であるが、大凡300機が前線線で喰止められたと予想されている。オナワチ、この数字については、275機がアメリカ海軍の空母のパイロット達の餌食となつたと見られている。

しかし我が空軍は無傷であつた。駆逐艦2隻、高速掃海艇1隻、エルエス・ティ(LBT)1隻が特攻機によつて撃沈され、又駆逐艦11隻、高速掃海艇1隻、護衛艦3隻、掃海艇3及び空母ハンコックが損害を受けた。引続く2ヶ月間の戦中合衆国海軍は、未曾有の痛手をくらつた。神風は、特攻隊において8回以上吹きまくつた。しかし、その各攻撃のあと、アメリカ海軍は死傷となつた。艦艇を弾り、傷ついた船の処置をし、沈められたり破壊されたりした艦船を新しい船と取り替え、再び戦闘に立ち上つた。残りの総攻撃は、4月12日から13日、4月15日から16日、4月27日から28日、5月3日から4日、5月10日から11日、5月24日から25日、5月27日から28日、6月3日から7日へかけて起つた。こゝに含まれた航空機の数は当分の日本機の有効保有数字に類つた。しかし、各攻撃はよろしき兵器であつた。それでも各攻撃毎に甚大な数に上るアメリカ軍人の死傷者を出した。

4月10日までに同戦闘はほとんど終りを告げた。そして快速な空

出陣、レイテ島にこの逆襲をかけた。昭和20年6月1日、初撃隊
 島上降作戦後2日を経て、組織的抵抗は終止符を打ち、沖縄島の安
 全確保が宣言された。しかしながら、特攻攻撃の全ては、9回の総攻
 撃の間中に行われたのではないと言う事を理解すべきである。

計1445機の神風特攻機が同総攻撃中飛んだ。一方435機がばら
 ばらの小規模の攻撃となつて不規則におそいかゝつた。

しかして同作戦中用いられた特攻攻撃機は総計1900機を数えた。
 この1900機に上る攻撃機の中1450機は九州から飛立ち、残りは
 台湾から飛んで来た。日本軍は、合計2830機に上る航空機を神
 風機で失つた。この数字は普通戦闘において地上で破壊された航空機、
 特攻機当り機、作戦上の事故機及びその他のあらゆる原因で失われた
 飛行機を含む。飛び立つた1900機の特別攻撃機の内、約700
 機が沖縄上空で失われたと予想されている。又この700機のうち
 182機が体当りし、77機が相手にわずかばかりの損害を与えたと
 信ぜられた。我がアメリカ軍の 殺空襲(特攻々撃)による損害は、
 22隻の艇艇が沈められ、172隻が損害を受けた。沖縄作戦中にお
 ける合衆国艦艇損失は、30隻の船の沈没と223隻の損害であつ
 た。太平洋作戦区域総指揮官により、昭和20年9月1日発行され
 た公式の報告は、神風特攻機の攻撃によるアメリカ艦艇の損害を次
 の如くリストした。

沈没：駆逐艦 7 高速掃海艇 1 高速輸送船 2
 掃海艇 1 駆逐艇 1 水陸両用舟艇 5
 損傷：戦艦 2 大型空母 5 護衛空母 3 高速洋艦 2 軽巡洋艦 2
 駆逐艦 74 高速掃海艇 10 輸送船 15 貨物船 3
 掃海艇 2 機雷敷設艇 1 艇機雷敷設艇 2 水上飛行艇母船 3

沈没：駆逐艦 7 高速掃海艇 1 高速輸送船 2
 水陸両用舟艇 5

損傷：戦艦の損害は空中戦において267、損害を受けた。空
 上において229、その他の原因で292機に達した。

4900人以上のアメリカ海軍々人が戦死し、この数字より一寸ほ
 か少ない数の軍人が負傷した。この死者数数のほとんどは神風
 機によるものであつた。我が方が受けた前すべき損害が特攻々撃
 の結果をはつきりと示している。

沖縄戦における神風
特別攻撃隊について



特攻機エンタープライズに命中



： 空軍攻撃の犠牲となつた駆逐艦ニユーコム号



2. 空襲の体当りにより炎上した米空母ハンコック号 1945 4. 7



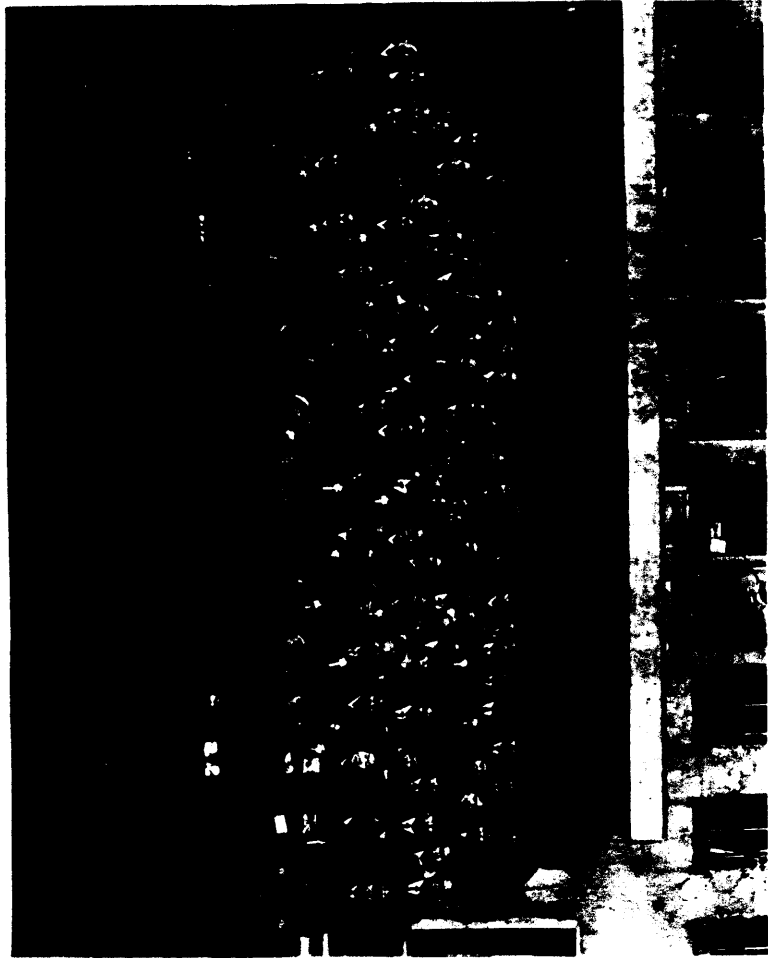
3. 空襲攻撃を受け炎上した米空母バンカー・ヒル号 1945 5. 11



鹿兒島県鹿屋市の坂口遺跡の慰霊塔



同上の碑文



本記事は米海軍中尉 R.L.
WEHRMESTER 氏が書かれ
米国雑誌 NAVAL INSTITUTE
に掲載されたものである。

海上自衛隊
鹿屋航空隊複製

沖縄 - 西の神風

米海軍のR.L. シルバース - 執筆

沖縄に於ける第二次世界大戦の戦力は戦事記録の英例に
 似て居る。と申すは、此処に於て1945年春、民族が自衛
 攻撃に及ぶ強悍な方法に於て敵国海軍軍力の全滅を企
 図した事である。82日間の戦力は、奇襲攻撃の後、82日間の
 日本が押し入る若人達は沖縄周辺の海空に死傷した者上
 へたのである。と12月2日、新米海軍の将校は攻撃の
 原因を述べた。此の足る戦力は、
 どの美空隊も、
 船隊を破壊し、
 船隊を破壊し、

沖縄は西の諸島(琉球)の沖最も大きく人口も最も
 多い島である。工業地九州福岡の350マイル東京に845マイル
 である。島のアイランドは、B-29基地より1,210マイル
 先に居て、敵艦の航行地を提供し、この地より船は
 立ち上る型、飛行機の作戦に進行するに必要である。沖縄は
 島の数個所に軍事の燃料貯油地があり、且つ連合軍による
 沖縄占有は、日本の台湾、朝鮮、及び中国本土との連絡を切
 り取るに至り得た。然し、この沖縄は日本人の理解が
 理解せられなことはである。日本の計画は、使眼を以て
 不足の足場となつた。と云ふ事から来る、ガサガサの
 重要性と云ふべきである。

海軍
 史
 記
 第
 一
 巻
 第
 一
 章
 第
 一
 節

題

去り、以て日本国を国難から救った“神の吹かせ給うた風”
……神風が、日本の若い飛行士達の愛国心に裏打ち
されて、人間の弾丸となつて、今回再び吹いて来ると
うにこの熱烈な祈りから生れてくるのである」と。

然し神風特攻隊の攻撃は、天来のインスピレーション以上のものを
日本国民に与へた。戦時中の日本陸軍の空軍総司令部
総指揮官 河辺中将は、戦後言つて曰、「我が如く
る科学上の優越に依つて劣るべきと云ふ精神の不足を堅
持し、我がやめるべき考へは夢寐にてもわづかたつた
にもかかわらず、我々の精神は、日本人は神風特攻隊を
行為”とは見做さず、^{海軍}井上力平大佐が説明した
様に、「我が日本人は、生命を天皇と国家に捧げている。又
我が武士道に従つて、戦場の死所を得ることを望む
神風精神は斯にた感懐に端を發するものなり」

神風特攻隊の背後には軍事的な理由も無数であつ
た。本質的には之等のものは上島沖海戦に於ける初期の
自衛攻撃の背後に在る理由と一致した。然し1945年4月
日本人が見出した戦局は六箇月前のそれより一層悪かつた。
レイテ、ルビアン、続く諸海戦、及び我が(アメリカ)潜水
艦による日本の補給線に對する封鎖作戦によつて蒙つた
甚大な損害の爲、日本の航空機、パイロット、飛行機製造
原材料に於ける不足は益々甚だしいものであつた。

日本帝國海軍は超弩級航空母艦大和、巡洋航空母艦及び九隻の
駆逐艦から成る一編隊を編成した戦艦部隊に、其の助けを
得た。然し此の勢力は、米軍機動部隊の航空機が、日本海
から出撃する日本艦隊を捕獲した4月7日、3隻の駆逐艦

を断つて悉く海軍のまことに消え失せた。日本側が我々の会戦を望めずかつた以上、残された道は唯、一つしか無かつた。訓練日数少く、経験の少く(飛行時間僅か100時間)パイロットは自給工要に用ゐらざれば外、道は無かつた。又神祕天皇の爲、祭典人の生贖として生命を捨てようとする人間的資材は不足しなかつた。日本空軍は予備上、武士道の掟に従つて神風戦術を取らざるを得なかつた。斯くて戦局の結末は定まつた。日本、大空軍は全軍が~~自給~~工要の手段に訴へるべきであるとは未嘗有の命令を發した可き不慮言した。之れ其の特別工要は予備上、我がアメリカの同僚が陸海空共同作戦に採るべき唯一の方法にほつたのである。中絶戦の最初の主要作戦は82隻の艦艇が成る第58機動部隊が九州の飛行場及吳や神戸の艦隊基地に空襲を加へた。1945年3月18日から21日の間に起つた。アメリカ軍の飛行機計116機の犠牲を払つて528機の敵機を撃墜し、地上に在る16機を撃破し多数の格納庫工場倉庫を破壊若しくは之に損害を与へた。此の攻撃の結果、日本軍は初期の中絶上陸作戦後、死んど一週間のあいだ、我が方に強力な空襲を全く加へるにしが出来なかつた。

4月1日、攻撃隊はハグシ海軍に上陸し、栗谷、カテナ飛行場へと進軍した。4月6日と7日、危殆に瀕した第3の怒りをこめて神風が吹きまわつた。此の最初の9回に亘り神風総攻撃に於て、殆んど同数の普通の戦闘機や偵察機に半つた355機の特別工要機が中絶を免れた。二週間にはわたる第58機動部隊に於て22神風機が米艦船への衝空(存当り)に成功した。日本側の損害合計は未知であるが、大凡300機が焚焼されて喰止められたと予想される。即ち、此の数字については、275機がアメリカ海軍の空母のパイロット達の餌食とまつたと見られる。然し我が空軍は無傷であつた。専ら逐艦2隻、高速掃海艇1隻

エル・エス・ティ(LST)1隻が特攻材に於て喪失され、又駆逐艦11隻、高速掃海艇1隻、護衛駆逐艦3隻、掃海艇3隻、空母ハンコックが損傷を受けた。引続く2ヶ月間の战斗中、合衆軍海軍は未曾有の痛棒をくらった。神風は総攻襲に於て8回以上吹えまくった。然し、各攻襲のあと、アメリカ海軍は死傷者を出し、艦艇を襲り、傷つた舟の処置をし、沈められたり石炭を吐いたりした船舶を討つし、船と取り替へ、再び战斗中立ちあつた。

残りの総攻襲は4月12日から13日、4月15日から16日、4月27日から28日、5月3日から4日、5月10日から11日、5月24日から25日、5月27日から28日、6月3日から7日にかけて起つた。最も多かった航空材の数は当時の日本機の有効数は半減した。然し、各攻襲はよくした攻襲であつた。よつて各攻襲毎に甚大なる以上のアメリカ軍人の死傷者を出した。

6月10日迄、同戦いは殆んど終りを告げた。是れが快速空母は、以て台湾にその進路を向けた。昭和20年6月21日、初期沖縄上陸作戦後82日を至て、組織的抵抗は終止符を打ち、沖縄島の安全を確保が宣言された。併し乍ら、自殺攻襲の全ては9回の総攻襲の間に行われたものではあるが、その理由を説明する。

計1,465機の神風特攻材が同総攻襲中飛入た。一方435機が、はるくの小規模の攻襲とほつて現地に飛入つた。

而して同作戦中用いられた自殺攻襲材は計1,900機を要した。此の1,900機に上る攻襲材の中、1,650機は九州から飛立た。残りは台湾から飛入つた。日本軍は合計7,830機に上る航空材を沖縄戦で失つた。此の数字は普通戦中の地上石炭を吐いた自空材、自殺特攻材、作戦中の事故材、及びその他の理由で失われた飛行材数を含む。飛立つた1,900機の特別攻襲材の内、約900機が沖縄上空に失われたと推定される。又此の900機の内、152機が特攻材、97機が

相対的損失報告を述べたことになった。我がアメリカ軍の自衛空
 艦(特攻隊)による損害は22隻の船隻が沈没し172隻が損
 傷を受けた。この戦い中における合衆の海軍船隻の損失
 は30隻の船が沈没し223隻の損傷であった。太平洋作戦中
 親補佐官に依り1942年9月11日発行された公式の報告は、神
 風特攻隊の攻撃によるアメリカ海軍の損害を次の如く列した。

喪失： 駆逐艦 9、 高速掃海艇 1、 高速輸送船 2、
 掃海艇 1、 駆逐艦 1、 水陸両用艇 8。

損傷： 戦艦 8、 大型空母 5、 護衛空母 3、
 重巡洋艦 2、 軽巡洋艦 2、 駆逐艦 74、
 高速掃海艇 10、 輸送船 15、 貨物の船 3、
 掃海艇 7、 水雷敷設艦 1、 軽水雷敷設艦 9
 水上飛行艇母船 3、 油槽船 1、 測量船 1、
 病院船 1、 掃海艇 2、 駆逐艦 1、
 水陸両用艇 24

合衆の航空機の損害は空中戦に於て269、損害を
 蒙った空母上に於て229、その他の原因で292機に達した。
 4,900人以上のアメリカ海軍の兵士が戦死し、此の数字より
 一寸ばかり少い数の軍人が負傷した。此の死傷者数の殆んど
 8割は神風特攻隊に依りてであった。我が方が受けたた
 べき損害が自衛隊の攻撃を以て示してゐるが一方、神風
 特攻隊は之を打ちたがりの出来た武器ではなかつた。我々はやがて
 其の対抗戦術を發展させたのである。一般に我が防衛隊は
 次の3つの部分に於て： 長射程(long range)の中射程、短射程
 長射程防衛は根本的に次の3つの手段に成る： B-29による
 空襲、空母艦隊戦に於ける波状攻撃、及、夜間攻撃
 攻撃の二者である。日本海軍の野村良口中佐は1942年

11月1日、此の一連のアメリカの作戦は沖縄に対する神風攻襲の事も著しく鈍らせたと言論評した。スプリングス提督が作戦に必要飛行機を要請したのに応じて(此は4月15日から16日にかけての第3次神風総攻襲後示されたのであるが)アメリカ陸軍の空軍は九州及四国の17飛行場に連日空襲を開始した。而して13-29機は4月17日から5月11日にかけての期間中2,104回の出撃飛行を要した。此らの空襲が日本軍にかなりの復讐を及ぼせ、且、彼らが大規模な敵空襲の計画を遂行し且、実行するのを困難にしたので、沖縄の空襲は段々減退傾向にある。4月17日と5月11日の間で見積りしているのであるが、同期間中の1,405回の自殺出撃の中の9割5分の飛行機が飛んだ。そして同じ日に重傷日本軍基地の若干は超空の要塞B-29で火撃された。スプリングス提督が命じて特別攻撃隊の最初の出撃は、明かには戦闘機が第一層の必要である事を示した。而して昭和19年11月我が軍の大規模な航空機の補充を要する事に決定した。雷電の標準数は18機から15機に減らされ、急降下火撃機は24機から15機に減らされた。戦闘機の数は54機から73機に増加した。其の結果として我々は空中偵察戦の為に多くの飛行機を準備し、且つ長射程防衛用としての戦闘機の波状火撃機、夜間ジュータン火撃機飛行作戦に備える事が出来た。恐らく夜間ジュータン火撃機は他のどの様な形式の攻撃機よりも自殺攻撃のための高文(日有)の諸準備を打ちくたすのに、大きな効果があるかと考えらる。

い。— 小隊はさういふ。いかに戦艦隊を分るべきか
 海令さういふこと。当然 基地の別々新隊大を備
 加と余議んたい。四月十日の各艦隊基地に配送艦
 二隻以上が支艦艇四隻に強化さう。四月十九日には島
 の配送艦七隻のさう。この作戦期間中、最近の島中
 援護と但し方の隊行隊が不足さう。各基地の上
 には一日一木隊の戦術隊七とす。哨戒隊はさう多
 少に支艦艇隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊
 水心と第二の新隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊
 列と米水心。日村に支艦艇隊隊隊隊隊隊隊隊隊
 作戦期間中、船は3000以上(支艦艇隊隊隊隊隊隊
 若直隊隊隊隊隊隊)の日本隊に改組さう。長年
 専業主隊に證明さう。海令はさういふとす。二

重巡隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊
 水心。大艦隊が予備隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊
 海令にさういふ。海令にさういふ。海令にさういふ。
 重巡隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊
 隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊
 隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊
 隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊
 隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊
 隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊
 隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊
 隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊
 隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊
 隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊
 隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊
 隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊
 隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊隊

日本人はまた空母に指向する作戦用航空料を確保しておく必要だと認め
 と此等の航空料の存在を我々に知らせる為 遠隔の場所に移すことを行った。
 例として台湾に於ける飛行料は地上近く分散にあり、海道路が乏しい
 引込められたことは至らなく、一ツツとスビに作り直された運搬
 された。飛行料は従来の駐紮しつや村々に駐紮したある一方若干
 飛行料は部分別に露出した。駐紮しつや村やその他の駐紮飛行
 場々の建設に努めた。この方法で日本人は何よりも我々の迷はせぬ
 ことであろう。陸軍航空隊部は在台灣的飛行料は89村と見積
 りているが時空集は70以上にのぼる飛行料が存在していること
 事実によりも明らかである。

我々の防衛を考慮し日本人は「空母」レーダーが消滅した後の攻撃
 の飛行料は輸送機や空母を補給するに於いては「空母」を補給するに
 必要とする。これは我々の最大の弱点と見做され、攻撃隊は密に進行
 攻撃隊は空母を攻撃するに努めた。攻撃隊は空母を攻撃するに
 時期は至明りと明瞭に夜を待たせしめ、攻撃開始は目標物
 への侵入両面に用いられた。飛行料は十分な使用された。航空料
 の型は十分異なっていた。これは「空母」の飛行料は、飛行料は、飛行料
 の飛行料は、攻撃隊は「空母」(我々のレーダー攻撃に某国は我々の
 アルミ箔)の侵入に飛行料の飛行料は、飛行料は、飛行料は、飛行料は、
 攻撃隊は「空母」(我々のレーダー攻撃に某国は我々のアルミ箔)の侵入に
 飛行料の飛行料は、飛行料は、飛行料は、飛行料は、飛行料は、飛行料は、
 レーダーの高度を測定するに努めた。攻撃隊は、飛行料は、飛行料は、
 飛行料は、飛行料は、飛行料は、飛行料は、飛行料は、飛行料は、

先般初に播せし46機は自航機は丁度最大限の高度で目的地に接近するまでと云ふこととす。予て吹送機は初期にあっては攻撃機は18,000フィートに達する高度で概算レール-4-の南緯46度と恰も240フィートの低空に降下し、攻撃機は約1/2の燃料消費を要し、後は概算9,000フィートの高度とす。然しながら我々のレール-4-は概算5000フィートに達するまで燃料も少なくす。

自航機10機に1機は46度南緯の空母の目標とす。時々は接近するが、かかるように思はれぬ。船尾より空母を攻撃し、其部IL-4-を4000フィートに降下し、船の回避行動能力を減らすことと解つた。

自航機に於て^機燃料消費を要し、聯合攻撃機は燃料が大幅に減少した。5月3日に小型駆逐艦は神風により撃沈された。以下はどの艦も燃料消費が3/4に達し、1機は垂直に突込み、1機は水平に突込み、1機は噴き入り、かく12機は46度南緯の攻撃機はコケースを浴びて殆んど撃沈された。5月11日、駆逐艦エバースは神風により撃沈された。丁度1週間後、5月11日、駆逐艦エバースは神風により撃沈された。2機は多大の損害を受けた。多数の艦船と海軍の人員は記録なしに帰還した。報告は、

沖程で「ニコ」1機は砂浜に墜ち、小型駆逐艦1機は縦横ロケット自航ミサイル「桜花」を撃ち落した。桜花は「M」爆薬の胴体下部から射出され、120度南緯とす。その高度は1,800フィートの高度で高速で突入し、そのミサイルの使用は極端に制限された。

沖程の燃料強化と自航機攻撃機の弱体化と云ふことが、

神風が我艦隊を貫通し成功したのと同様に我々の空母に損害を
与えた。投擲された水雷弾は我々の空母を撃破し、我々の空母を
沈没させた。

若し日本の航空機と自艦隊の損失概算は合計で11隻に達した
と12%の敵航空機損失は我々の海上兵力の80%に近い損害を77%に
近い我々の艦隊の損害を証明した。我々の神風の攻撃が成功した後に
高速空母は航空機生産を破壊し、我々の海域への航空機活動は瓦解す
るため日本本土空襲の計画は多くなり、我々の空母は沈没した。

合衆国の海軍省は神風は第二次世界大戦中に日本に空襲を
与えた唯一の最も効果的な航空兵器であったと評価した。

兵(神風特攻隊)吾(我)艦隊(艦隊)を(を)襲(襲)撃(撃)す(す)に(に)決(決)意(意)す(す)
 者(者)也(也) 此(此)種(種)の(の)上(上)陸(陸)作(作)戦(戦)を(を)遂(遂)行(行)す(す)に(に)必(必)ず(ず)
 優(優)越(越)性(性)を(を)持(持)た(た)ね(ね)ば(ば)不(不)可(可)成(成)事(事)と(と)す(す)べ(べ)し(し)
 神風(神風)作(作)戦(戦)の(の)火(火)力(力)の(の)強(強)さ(さ)が(が)充(充)分(分)に(に)保(保)た(た)れ(れ)ば(ば)な(な)ら(ら)ず(ず)
 特(特)攻(攻)隊(隊)の(の)思(思)い(い)は(は)是(是)の(の)如(如)き(き)に(に)あ(あ)る(る)
 特(特)攻(攻)隊(隊)の(の)小(小)型(型)機(機)體(體)の(の)輸(輸)送(送)に(に)必(必)ず(ず)打(打)撃(撃)受(受)け(け)
 得(得)る(る)程(程)の(の)損(損)傷(傷)を(を)受(受)け(け)る(る)事(事)は(は)必(必)ず(ず)
 及(及)び(び)戦(戦)艦(艦)の(の)裝(裝)甲(甲)厚(厚)さ(さ)を(を)考(考)へ(へ)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)ず(ず)は(は)な(な)ら(ら)ず(ず)
 損(損)傷(傷)を(を)受(受)け(け)る(る)事(事)は(は)必(必)ず(ず)あ(あ)ら(ら)ず(ず)は(は)な(な)ら(ら)ず(ず)
 母(母)は(は)特(特)攻(攻)隊(隊)に(に)対(対)し(し)て(て)死(死)す(す)べ(べ)し(し)と(と)す(す)
 英(英)國(國)空(空)母(母)に(に)対(対)し(し)て(て)死(死)す(す)べ(べ)し(し)と(と)す(す)に(に)あ(あ)ら(ら)ず(ず)
 ら(ら)ず(ず) 英(英)國(國)空(空)母(母)の(の)損(損)傷(傷)を(を)受(受)け(け)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)ず(ず)
 である(である) 英(英)國(國)空(空)母(母)の(の)裝(裝)甲(甲)厚(厚)さ(さ)を(を)考(考)へ(へ)る(る)に(に)
 なる(なる)英(英)國(國)空(空)母(母)の(の)損(損)傷(傷)は(は)必(必)ず(ず)あ(あ)ら(ら)ず(ず)は(は)な(な)ら(ら)ず(ず)
 イ(イ)ン(ン)大(大)佐(佐)は(は)武(武)士(士)の(の)死(死)の(の)懼(懼)れ(れ)に(に)あ(あ)ら(ら)ず(ず)全(全)體(體)の(の)
 普(普)通(通)的(的)な(な)考(考)え(え)の(の)態(態)を(を)根(根)本(本)的(的)に(に)正(正)し(し)て(て)中(中)國(國)戦(戦)線(線)
 にお(お)ける(ける)神(神)風(風)の(の)特(特)攻(攻)は(は)フ(フ)リ(リ)ッ(ッ)ン(ン)に(に)あ(あ)る(る)英(英)皇(皇)の(の)存(存)心(心)
 自(自)殺(殺)使(使)命(命)を(を)持(持)つ(つ)て(て)死(死)す(す)べ(べ)し(し)と(と)す(す)に(に)あ(あ)ら(ら)ず(ず)は(は)な(な)ら(ら)ず(ず)
 変(変)化(化)の(の)明(明)白(白)に(に)あ(あ)ら(ら)ず(ず)は(は)な(な)ら(ら)ず(ず) 英(英)皇(皇)の(の)時(時)
 既(既)に(に)自(自)殺(殺)使(使)命(命)を(を)持(持)つ(つ)て(て)死(死)す(す)べ(べ)し(し)と(と)す(す)に(に)あ(あ)ら(ら)ず(ず)は(は)な(な)ら(ら)ず(ず)
 死(死)す(す)べ(べ)し(し)と(と)す(す)に(に)あ(あ)ら(ら)ず(ず)は(は)な(な)ら(ら)ず(ず) 英(英)皇(皇)の(の)時(時)
 確(確)信(信)し(し)て(て)死(死)す(す)べ(べ)し(し)と(と)す(す)に(に)あ(あ)ら(ら)ず(ず)は(は)な(な)ら(ら)ず(ず) 英(英)皇(皇)の(の)時(時)
 命(命)を(を)受(受)け(け)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)ず(ず)は(は)な(な)ら(ら)ず(ず) 英(英)皇(皇)の(の)時(時)
 強(強)烈(烈)に(に)服(服)従(従)せ(せ)ら(ら)れ(れ)る(る)に(に)あ(あ)ら(ら)ず(ず)は(は)な(な)ら(ら)ず(ず)

中絶

如 数々の意図を察した神風は、そのあつたこと、他の
 多くの（この月標）一月（この月標）は、（この月標）度（この月標）
 亦 相対僅。この半軍艦の側に着水し捕獲した。この
 如く言つた観念の戦線の（この月標）（この月標）作戦の効果の
 減退する（この月標）につれて特攻隊全隊に（この月標）つた。
 特攻の報告の時、非常：誇張されて居るので日本の
 軍首脳部は神風の成果を實際に評価するとは出来
 なかった。従つて指揮官達に戦術及び攻撃方法を
 最も有効に決定せよと（この月標）困難であった。
 この方針全体は、ついで特攻隊に（この月標）僅か、5隻の米國
 大型空母の破壊：（この月標）確認：（この月標）27日（この月標）
 指揮官の部下だけで8隻の空母を破壊したと報告
 して居たのである。
 4月6日及び7日の（この月標）の（この月標）の報告によれば、70機の
 輸送船、19機の母艦、（この月標）30隻以上の（この月標）
 果ては（この月標）23隻の（この月標）破壊したと（この月標）（この月標）
 實際には、22機の（この月標）（この月標）（この月標）4隻の（この月標）
 1隻の大型空母を含む、19隻の（この月標）（この月標）（この月標）
 日本の民衆は神風の成果を（この月標）（この月標）不正確な報告
 によって（この月標）（この月標）特攻隊の（この月標）（この月標）
 である。4月16日東京放送は次の（この月標）（この月標）
 「3月23日以降の神風特攻隊は、（この月標）（この月標）
 393隻の米軍艦船の（この月標）（この月標）（この月標）
 空母21隻、戦艦10隻、戦艦若しくは大型巡洋艦16隻
 大型船隻2隻、巡洋艦5隻、駆逐艦53隻
 85隻の巡洋艦（この月標）（この月標）（この月標）
 艦隊航空隊（ ）

217機の艦船を、確実な東に北へ
沖運のありし中、艦隊の6割を喪失若くは破壊
した。

実際此の時迄、駆逐艦亦5隻以下、半隻、
14隻の喪失にすぎた。

フィリピンにおける神風作戦の序初めにおいて、
日本の指揮官は、此の対攻戦は、総ての戦国及び
戦術の課程の全の異端である事を悟りておぼ
横井提督の意見にすぎた。

「沖運の戦いは結論的に、特攻の不利を証明した。
敵の機動部隊を東流するた、用役の要は、根本的に
無意味と云ふ、今の狂気の表れである。

最も結論的は神風特攻隊の失敗である。これは
1945年6月21日連合軍による沖運島の占領の
宣言にすぎた。

（2）（2）の占領に続いて、829日の戦いは
世界戦史上最も悲惨な戦い（戦史に永久に
留まる）である。

防衛研修所

班

長



昭33.5.

陸軍航空隊教科材料科長
井内之丞海佐 様

防衛研究所戦史室
高野 孝信 官

戦史参考資料受領の通知

4月30日付の御送付の資料
下記のとおり受領した。

御要配、深謝いたします。

此

1. United States Naval Institute Proceedings
Vol. 83 June 1957 No. 6 (P. 632-641)

・ 13人英文要稿

2. 上記13人英文(摘録) "沖縄戦"の神風特
別攻撃隊の戦況 (陸軍航空隊参考) 1冊

業務連絡

33.4.30

防衛研修所戦史室

高野 事務官 殿

鹿屋航空隊教務教材科長

2等海佐 井 関 環

戦史参考資料送付に関する通知

標記について、特攻機に関する参考資料をほん訳したので送
付する。

(註) 参考図書：United States

Naval Institute

Proceedings

Vol. 83 June 1957 巻 6

(P. 632 ~ P. 641)

添付書類：別紙

ほん訳文

戰 史 室

以下 昭和九年五月
阿部平次郎氏(海軍)の寄贈

昭和四十二年三月二十二日二十三回忌

旧^小鷹屋航空基地特攻隊戦没者慰霊祭

鹿児島県鷹屋市



今日もまた
黒潮おどる海洋に
とまたり行まじ
友はかえらす

特攻隊戦没者慰霊塔

昭和32年3月20日建立

特攻隊戦没者慰霊塔建立の由来

沖繩における第二次世界大戦の戦斗は、戦争記録に類列のない激烈なものであつたといわれ、この窮地を挽回せんものと昭和20年の春、特攻攻撃という独特の方法により、敵国海空軍兵力を全滅すべく企てたゆかりの地である。

82日間の戦斗は苛烈を極めた。そして、この短い期間に日本のすばらしい若人達は、黒潮おどる沖繩周辺に飛び立つた。

もたら青春の希望に燃える生命を危急に殲した祖国のために、敢然として捧げた前途有為なこれら若者たち、世上ともすれば敗戦に終つた第二次世界大戦のこのような犠牲が忘れられがちである。

今日この結果はどうであつたにしても、これら身を懸して祖国の難に殉じた人々の祖国愛は称讃されるべきであり、これら若人の至情至純の精神は、その御霊とともに永えに祀られ定業とともに後世に語りなく伝えられなければならない。

その最もゆかりの深い地として、また本土最南端海軍航空基地として、多くの特攻隊員が飛び立つて再び帰ることがなかつた戦後の地この「鹿屋」に、その御霊を祀る慰霊塔を建立すべく、昭和32年10月鹿屋市長を会長とする「旧鹿屋航空基地特攻隊戦没者慰霊塔建立期成会」が結成せられ、全国に御協力を呼びかけたところ、**市**内は勿論、ひろく各方面から多くの浄財が寄せられた。

これに基づいて、航空隊を眼前に眺望する小塚丘にその御霊を永えに平和の礎として祀る慰霊の碑を昭和33年3月20日建立されたものである。

20. 4. 14	乳波空	第二乳波隊	零戦	3	中尉 荒倉高教任か2名
"	大村空	第二神剣隊	"	9	中尉 台原 直任か8名
20. 4. 16	7.2/空	第五神雷部隊花隊	桜花	5	中尉 宮下 平任か4名
"	" 攻撃708	" 攻撃隊	陸攻	4	上飛曹 佐藤 純任か27名
"	谷田祐空	第二昭和隊	零戦	4	少尉 草村昌直任か3名
"	元山空	第三七生隊	"	3	少尉 町出 俊任か2名
"	大村空	第三神剣隊	"	3	飛曹佐 森田貞一郎任か1名
"	7.2/空	第七建武隊	"	7	上飛曹 森 茂士任か8名
"	谷田祐空	第三昭和隊	"	3	少尉 中村栄三任か2名
"	元山空	第四七生隊	"	9	少尉 石橋石扇任か8名
"	大村空	第四神剣隊	"	1	二飛曹 成谷部真治
"	7.2/空	第八建武隊	"	5	一飛曹 石田三郎任か4名
"	乳波空	第三乳波隊	"	7	中尉 中村秀正任か6名
"	谷田祐空	第四昭和隊	"	2	少尉 有村善岳任か1名

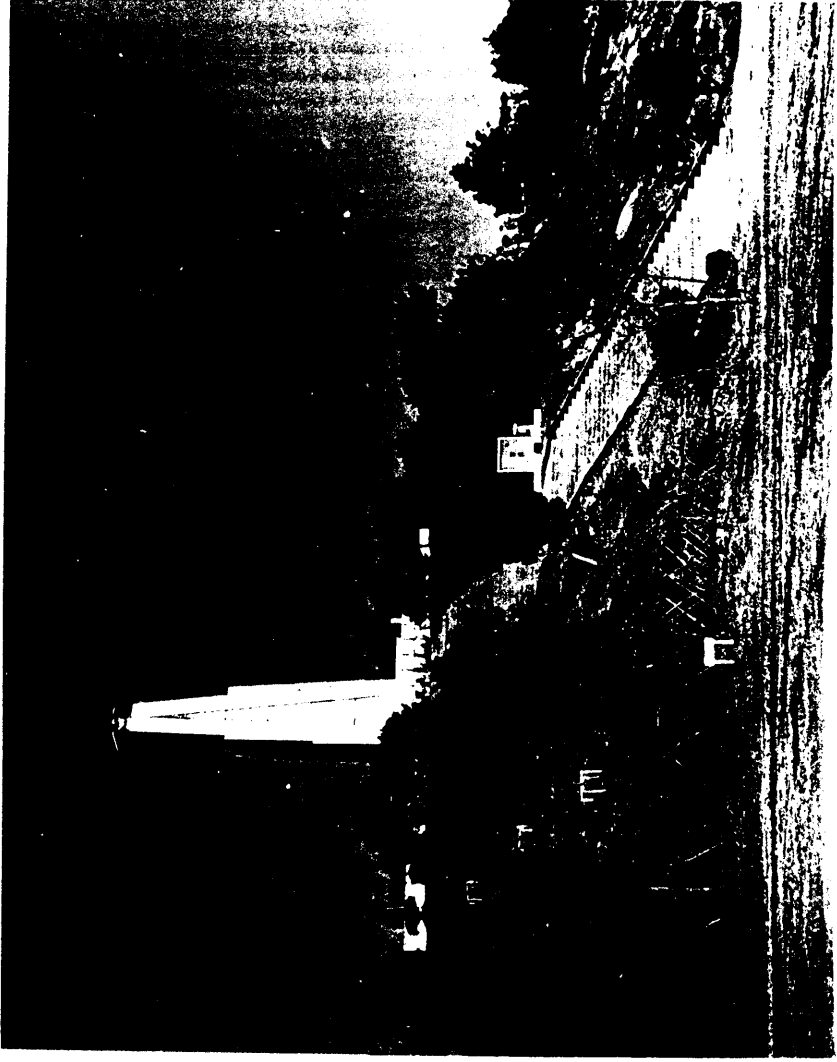
20. 4. 28	7.2/空	第六神雷部隊花隊	桜花	1	一飛曹 山崎直隆
20. 4. 29	乳波空	第四乳波隊	零戦	5	中尉 米加田甫建任か4名
"	元山空	第五七生隊	"	4	少尉 埴日 進任か3名
"	谷田祐空	第五昭和隊	"	8	少尉 木部海 澄任か7名
"	7.2/空	第九建武隊	"	10	中尉 多木 彦任か9名
20. 5. 4	"	第七神雷部隊花隊	桜花	6	中尉 大福 通任か5名
"	" 攻撃708	" 攻撃隊	陸攻	5	少尉 勝又武彦任か34名
"	大村空	第五神剣隊	零戦	15	中尉 藤貝 巖任か14名
20. 5. 11	7.2/空	第八神雷部隊花隊	桜花	3	中尉 高野次郎任か2名
"	" 攻撃708	" 攻撃隊	陸攻	3	中尉 古谷真二任か20名
"	" 戦斗306	第六神剣隊	零戦	4	少尉 牧野 誠任か3名
"	"	第六昭和隊	"	2	少尉 根本 安任か1名
"	7.2/空	第十建武隊	"	4	中尉 桑田敏雄任か3名
"	" 戦斗306	第七昭和隊	"	6	中尉 安則盛三任か5名

20	5/11	7/2/空	第七七三隊	零戦	1	飛長	上月眞男	
"	"	"	戦斗306	"	9	中尉	西田清光ほか不詳	
21	5/14	"	第五戦隊	"	5	中尉	楠本二三夫ほか不詳	
"	"	"	第十一連隊	"	13	中尉	富安勇助ほか不詳	
"	"	"	戦斗306	"	3	中尉	藤田卓郎ほか不詳	
"	"	"	"	"	1	少尉	桑野 実	
22	5/24	高知空	第二白根隊	白菊	2	中尉	川田 茂樹 計40名	
"	"	7/2/空	第九神雷隊	理隊	3	"	計16名	
23	5/25	"	第二白根隊	白菊	1	"	計1名	
24	5/25	7/2/空	第九神雷隊	桜花	3	中尉	伊志武雄 計2名	
"	"	"	"	理隊	3	中尉	水吉 晃ほか不詳	
25	5/27	高知空	第二白根隊	白菊	5	中尉	古賀一雄ほか9名	
26	5/22	7/2/空	第十神雷隊	桜花	4	中尉	藤崎俊英ほか3名	
"	"	"	"	理隊	4	中尉	伊藤正一ほか計7名	

20	6/22	7/2/空	第一神雷隊	零戦	7	中尉	川口光男ほか6名	
22	6/26	高知空	第三白根隊	白菊	1	一飛曹	香木 茂ほか1名	

合計 70機 445機 826機

(このほか、陸軍関係の出撃もあつたが、資料が得られておりません。)



旧鹿屋航空基地特攻隊戦没者慰霊塔記

三六公望海上自衛隊鹿屋基地

昭和十一年四月旧日本海軍

建設支那事変第三次大戦

重要航空基地として活用

特戦隊次第緊急に陸軍に

昭和三年特別攻撃隊基地

おま子有餘の若人々を

小南空飛場を母とせし

出陣基地あり

身財物を食糧に代りて

幼果攻撃に如きを得

敵艦を沈没せしむる

徳先貴族に散る

農家の人々を

先陣として出陣し

当市に若人々を

彰修公を敬慕し

興隆を祈る

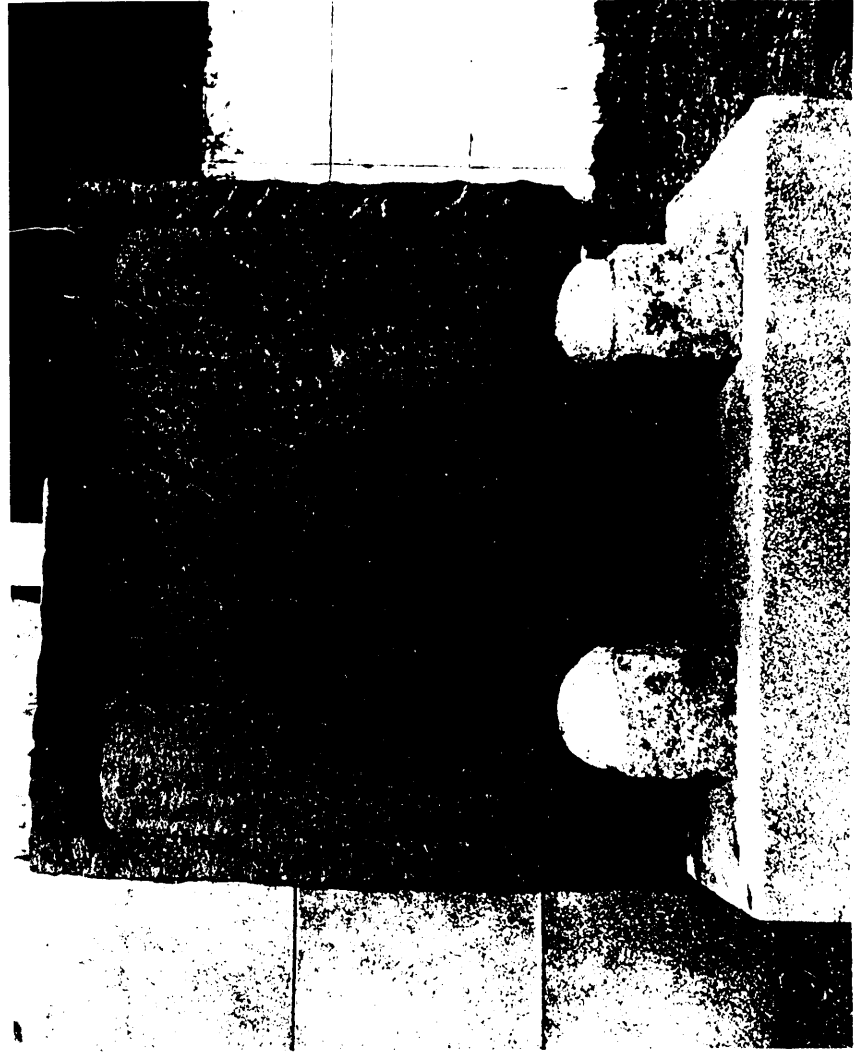
三年の基地見

今日黒潮を

おま子有餘

平和を

鹿屋市観光協会





27

名譽市民 永田良吉先生胸像除幕記念

昭和四十二年十一月三日

名譽市民 永田良吉先生顕彰会

